

崖状が雨水で侵食された形状からである。

秋田地名研究会「森林の沢地名」渡部景俊

おかもと【小池岡本^{おかもと}】

おかもと

地名は「山の麓^{ふもと}」の意。森山の西部山麓に位置し、寛永年間以降は「岡本恋路」と記された。秋田家文書にある「岡本小市村^{こいち}」の転訛ではないだろうか。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名

おかもと〈五城目町〉

馬場目川の下流右岸にそびえる森山の西麓と西方に広がる平野部に位置する。森山の西南麓に縄文晩期の下台遺跡がある。

〔中世〕岡本村。戦国期に見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行を安堵した朱印状写に、「西村・漆原・岡本・小市村」561石余とある（秋田家文書）。

中世ではこれが唯一の所見史料。岡本村と小市村^{こいち}は集落が隣接し、近世には岡本恋地村とも称するので、上記史料も「岡本小市村」であったかもしれない。

しかし関連史料では、小市村^{こいち}は単独でも記載され、「村」の字が見えない「漆原」も漆原村と銘記されている。小市村とは別個に岡本村が存在したとみられる。上記の合算石高のうち当村分は未詳。森山の西麓に中世の城館址がある。岡本城といい、一説では浦城主三浦氏が枝城として構築したといい、他の説では湊合戦で浦城落城後に秋田実季が浦地方（現八郎瀧町）支配のため、浦城に代わる城郭として岡本城を築いたという。天正18年～慶長6年の城主が安藤兵部（安藤備前守季村・岡本兵部孫村）というのは（秋田沿革史）事実であつたらしい。城郭の東方、山中にまつる岡本神社の境内には貞治5年の紀年銘板碑がある。

〔近世〕岡本村。江戸期に見える村名。出羽国秋田郡のうち。秋田藩領。慶長7年国替えの時、岡本城主安藤兵部は主君秋田実季に従って、常陸

国へ出発したが、当国雄勝郡院内まで行き、そこから引き返し、秋田藩家老渋江内膳政光に右筆として仕え、慶長14年頃の渋江氏領内巡見の時当地方を案案内以後、岡本村肝煎として土着。旧館址に曹洞宗陽広寺（一日市村清源寺）を開基。兵部の後は、旧家臣工藤氏が肝煎を継いだという（秋田風土記）。また、岡本村と小市村を合わせて1村とし、岡本恋地（岡本恋路）村とも称するようになったのも渋江氏巡見以来という。

藩政初期に秋田旧臣中川宮内、次いで横手^{ところあずかり}所預 戸村十太夫らが馬場目川以北の「秋田瀧東之内」12村開発の指紙を交付され、戸村堰を完成し新田開発の実をあげた。

「正保国絵図」では岡本新田村89石、「元禄7郡絵歯」でも岡本新田村105石余と図示。しかしこの間の「天和4年黒印高帳」では岡本恋地村当高105石余と表示。「宝永2年黒印高帳」以降の藩側記録はすべて岡本恋地村と表示。

「享保黒印高帳」で村有162石余・当高126石余（うち本田73・本田並14・新田39）、「寛政村附帳」で当高128石余（ほとんど給分）と認定。

「天保郷帳」では126石余。親郷一日市村の寄郷である。「享保郡邑記」では戸数26軒。享保6年から北接の小倉村内の山林へ草飼入会を認められていたという（町史）。

村鎮守神明社のほか修験常福院^{じゅうくふいん}がある。菅江真澄は当地方調査の析「岡本村森明庵」に宿泊（真澄遊覧記）。19世紀には西接の小池村の枝郷になったらしく（秋田風土記）、この頃から村名は岡本村のみの記載となる。

廃藩置県後、明治12年南秋田郡の村に当村名は見えず、同22年に成立した南秋田郡面瀧村の小字に岡本がある。

昭和31年八郎瀧町に合併、同33年八郎瀧町から岡本は五城町に編入となり、小池字岡本として地名を現在に伝える。

1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県

おきやち【夜叉袋沖谷地^{おきやち}】

【上沖谷地^{かみ}(旧一日市村)】